

## 『ハムレット』における死と永遠

前 田 利 雄

シェイクスピア劇は、全体として、とくに四大悲劇や歴史劇を通して、後期にはロマンス劇を通して神の恩寵なくしては人は永久に救われることがない人間の普遍的な本質的な実存を登場人物の行動と言葉を通して描くことによって人の「自然」に宿る悲劇的な「ハマルティア」（聖書のいう「罪」）と聖なる神の恩恵、すなわちアウグスチヌスの簡略に表現すれば「自然と恩恵」（*Nature and Grace*）の対比を変曲的に脚色しているにすぎない。『ハムレット』と『マクベス』を例にとれば、神の恩寵とキリストの贖罪的な死を必要としなければならぬことを自覚しつつも天使を嘆かしめる罪を犯して墮落した、かつて天使であった人々——マクベスやクロードィアス——を描くことによって恩恵から遠ざかった自然の悲惨さを劇化し、又信仰に生きる自然が「幸運な失敗」（*fortunate fall*）を通して苦難と恩恵を経験することによって自分の内面の罪を知るのみならず自己中心の「自然」をも超越することによって「救を見る」にいたり、己が意志でなく、神の意志の道具——「天の道具」——となって神の正義を達成する人々——マルコムやマクダフやハムレット——を描くことによって恩恵を概念でなく、霊的に実感することによって自己の自然を超越する信仰の巡礼者の魂を芸術化している。マルコムやマクダフやハムレットは、この意味では中世の信仰劇の主人公に類似している。彼らは外部的な罪というよりも彼らの内面に宿るむさぼりの罪によって失敗を演じ、苦難におちいることによって神の恩恵を仰ぎ、かつ自分の内面の罪を深く知ると同時に今までの自己中心の自然を超越してゆく。この意味

でこれらの主人公たちは、彼らの内面的罪深さをのぞけば劇の初めでは自分の犯した外部的な罪というよりむしろ他人の犯した罪がつくり出した環境の犠牲で苦しむ。この意味でマクダフの罪のない妻子の犠牲のように彼らもまたミルワード教授のいう「無垢な苦難」(“innocent suffering”)——無垢の人々が苦しむこと——を受けた人々である。これは女性を主人公とする劇『オセロウ』や『リア王』のデズデモウナやコーデリアにおいて特に顕著になってくる。これらの無垢な女性たちは、他人の罪の生んだ環境の犠牲者であるが、しかし彼らとて内面の欠陥から免れてはいない。彼らもまた人の「自然のもつ罪深さ」(“A natural guiltiness”) (『尺には尺を』二・二・一三九、五・一・三六八)のために悲劇を招き、苦難と神の恩恵を通して最初の彼らの自然を克服してゆくが、他人の罪の贖いのためにキリストの死に似た死を経験する。ハムレットの死も同じように自分の罪のみならず、他人の罪のためにも自己の死を招く。マクダフやマルコムは自分の死を見ることはないけれども、自分の魂にとって「最も貴重なもの」を殺害されることによって彼らもまたこの世に死んでいるのである。

このように見るとき、彼らの罪と死の問題は、パウロ的世界観に基礎を根ざしていることが分る。パウロが『ローマ人への手紙』の中で「此の死の体より我を救はん者は誰ぞや」と嘆いたときの死の体とは、人の自然の内に宿る「むさぼり」の罪にみちた体のことであり、パウロの対比とは「神の律法を喜ぶ」「内なる人」と「肢体の中にある罪の法」を喜ぶ自分の自然との戦いを指している。

わが欲する所の善は之をなさず、反って欲せぬ所の悪は之をなすなり。我もし欲せぬ所の事をなさば、之を行ふは我にあらす、我が中に宿る罪なり。然れば善をなさんと欲する我に悪ありとの法を、われ見出せり。われ中なる人にては神の律法を悦べど、わが肢体のうちに他の法ありて我が心の法と戦ひ、我を肢体

の中にある罪の法の下に虜<sup>あつ</sup>くするを見る。（ロマ書第七章一九—二三節）

For I do not the good thing, which I wolde, but the euil, which I wolde not, that do I.

Now if I do that I wolde not, it is no more I that do it, but the sinne that dwelleth in me.

I find them by the Law, that when I wolde do good, euil is present with me.

For I delite in the Law of God, concerning the inner man:

But I see another law in my membes, rebelling against the law of my minde, & leading me captiue unto the law of sinne, which is in my membes. (*Geneva*, To the Romans, 7:19-23)

この「中なる人」と「外なる人」の対立（ロマ書七・二二、コリント後書四・一六）は、モーゼの十戒やパ  
リサイの律法によって解消されることはなく、むしろ律法によって人の自然の内面のむさぼりの罪は刺激さ  
れ、人はむさぼりの罪を犯す。

なぜなら、律法を行うことによって、すべての人間は神の前に義とせられないからである。律法により  
て罪を知る（罪を犯す）。（ロマ書三・二〇）

律法に『貪<sup>こほ</sup>る忽<sup>は</sup>れ』と言はずば、慳貪<sup>けん</sup>を知らざりき、されど罪は機<sup>をり</sup>に乘じ誠命<sup>まことのみこと</sup>によりて各様の慳貪<sup>けん</sup>を我が  
うちに起せり、律法なくば罪は死にたるものなり。（ロマ書七・七）

Therefore by the workes of the Law shal no flesh be iustified in his sight: for by the Law cometh the knowledge of sinne. (Romans, 3:20)

What shal we say then? Is the Law sinne? God forbid. Nay, I knewe not sinne, but by the Law: for I had not knowen lust, except the Law had said, Thou shalt not lust. (*Ibid.*, 7:7)

人を死に至らせる内面の罪深さより人を救うものは、かくして律法でなく、「功いさをなくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて」人を義とする信仰である。しかし人の霊は信仰によって神の恩恵を通して永遠の生命と救に至るけれども、人の肉はその中に存在する罪によりて現実の死の報いを受けなくてはならない。

それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人、罪を犯しし故に死は凡ての人に及べり。(五・一二)

Wherefore, as by one man sinne entred into the worlde, and death by sinne, and so death went ouer all men: for as much as all men haue sinned. (*Ibid.*, 5:12)

それ罪の拂ふ価は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。

(十六・一三三)

For the wages of sinne is death: but the gifte of God is eternal life through Iesus Christ our Lord. (*Ibid.*, 6:23)

このことがシェイクスピアにおいて劇化されると、内面の貪りの罪、シェイクスピアのいう「生まれながらの自然の罪深き」(“natural guiltiness”)によって人は神の恩恵から離れるときは悲劇を招くが、苦難によって再び恩恵を仰ぎ、恩恵と一体となるとき、人の霊は永遠の生命に入り、肉体は死に至っても、その死による「一つの正しい行為」によって義とせられ、生命を得るに至ることも凡ての人に及ぶのである。パウロがアダム一人の罪によって罪が全人類に及んだように、キリストの聖なる死によって義と永遠の救が全人類に及んだと述べているとき、シェイクスピアは、パウロの罪と救の過程を、人の自然すべてに適応させているのみならず、信仰による恩恵を通して自分の自然を義とされた主人公の死もキリストの死と同じく劇の中の一つの人、少なくとも主人公に従う人々をも義とし、劇の中の世界を浄化するように描くのである。初期のハムレットが「この世はかなめが外れている、それを正しくするためにおれは生まれてきたとは何と因果な呪いか」(“The time is out of joint: O cursed spite, That ever I was born to set it right!”) (I. v. 189-190)と嘆いたとき、この悲しみは自分の肉の画策と意志を神としている傲慢な悲哀であるが、その後神の意志を己が意志とする信仰を「聖なる神」(“Divinity”)と「特別な神の摂理」(“a special providence”)を体験することによって学び知ってからは、「神のあわれみがあなたを助け給わんことを」「神の恩恵とあわれみがあなたが最も困り、必要としているときにあなたがたを助け給わんことを」(“help you mercy”), (“grace and mercy at your most need help you”) (I. v. 169 & 180)と祈ることを学び始めた王子に神が助力を与え始める。

ミルワード教授によれば、『ハムレット』劇の「罪のない人の苦しみ」はヨブ記の主人公ヨブの苦しみに類似するという。しかしそれ以上にロマ書の影響がよいと言うのは、至言である。というのはヨブ記のヨブの苦しみは、彼を襲った不幸によるのみでなく、それ以上に彼を苦しめたのは、ヨブの苦難はヨブの罪によるものであるという友人たちの非難的裁きによるものでもあるからである。その非難に対してヨブは、自分に罪はない、隣人の妻も召使いの女をも食ったことはないという主張が神が大嵐の中で現われるまでつづく。人間対人間において人は神の聖潔に対するような内面の罪を意識する必要はないことからヨブの友人の非難に対する彼の態度は正しいのであるが、新約の時代に入ってから、とくにルッターが教鞭を取ったウイテンベルグ大学でかつて学んだハムレットが、プロテスタントの信仰の特徴としてパウロ的な神学と信仰を神に対して抱いたことからヨブの意識に見られない内面の罪意識が王子に見られるのは自然である。義人がどうして苦しまねばならないか、というヨブの疑問がヨブを苦しめたようにハムレットの心をも悩ますことも事実であるが、ロマ書の「罪と恩恵」の思想がハムレットのみならず、この劇の登場人物すべてにわたって滲透し、彼らを苦しめていることも事実である。

ミルワード教授の批評を引用すれば、この問題は更に啓蒙されるであろう。

『ローマ人への手紙』の影響は、『ヨブ記』と同じ程に深く『ハムレット』に滲透しているからである（とつけ加えてよいであろう）。原罪の教義が最初の間人アダムの罪のみならず、また自然の継承によって先祖の運命の捲き添えをくった全人類の罪としても最も率直に提示され検討されているのはこの書翰の中である。ハムレット自身の強調も正にこの点にある。彼の内面の問題は父の死と母の再婚という事実を遙かに越えて両親と自分自身の両方の中にハムレットが見出した罪にまで発展する。彼が野蠻といわれて

も仕方がない位にオウフェリアに向って強調したように、「おれたち男共は救いようのない悪漢なのだ」。彼が劇の始めから終りまでじっとふさぎこんで考えつづけているものは、この問題についてである。ハムレットもその背後にある劇作家シェイクスピアもその問題の真の解決には至っていない。死というきびしい現実の中にも見出していないし、「覚悟が大切である」から、忍耐を克己的<sup>ストイシズム</sup>に採用しているように見える決断の中にも解決に至っていない。というのは唯一の解決は『ローマ人への手紙』の中でパウロが経験しているように、「我らの主イエス・キリストの恩恵」であるからである。それは『ハムレット』劇の終りで言外に表現されるとしても、容易に発見されない状態になっているけれども。

（ピーター・シルワード著『四大悲劇における聖書の影響』東京、一九八五年、四頁）

Here is a problem whose full treatment is presented, among the writings of the Bible, not so much in the Old Testament Book of *Job* as in the New Testament Epistle to the *Romans*, whose influence (it may be added) pervades the play of *Hamlet* no less than that of *Job*. It is in this Epistle that the doctrine of original sin is most openly proposed, as the sin not only of the first man, Adam, but of all men who are involved in the fate of their progenitor by virtue of natural inheritances. Here precisely is the emphasis of Hamlet himself, whose inner problem goes far beyond the facts of his father's death and his mother's remarriage to the sin he finds both in them and in himself. As he almost savagely insists to Ophelio, "We are arrant knaves all!" It is on this problem that he broods from first to last. Nor does he, or the dramatist behind him, come to any real solution of it, whether in the hard fact of death or in

the seemingly Stoic resolution on patience, seeing that "The readiness is all". For the only solution, as envisaged by Paul in *Romans*, is "the grace of Our Lord Jesus Christ," which remains hidden, if implicit, in the end of the play.

[Peter Milward, *The Biblical Influence in the Great Tragedies*, (Tokio, 1985) p. 4]

ミルワード教授がここで「原罪」という神学的な言葉を使っている罪の性質は、かんたんに言ってシニイックスピア的に表現すると、私がくり返してきた「人の生まれながらにしてもっている罪深さ」("a natural guiltiness")であり、パウロ的に言えば「内面のむさぼり」("covetousness") (ロー書一・二九、コリント後書九・五、エペソ書五・三、コロサイ書三・五) 又は「貪欲、淫欲」("concupiscence") (ロマ書七・八) のことである。ハムレットが卵をかえすために考え込むように卵を抱いて坐りつづけるめん鶏のように「深く物思いに沈みながら考えている」("Of'er which his melancholy sits on brood") (III. i. 174) とは、父の謎の死と母親の早急な再婚という事実のみでなく、P・ミルワード教授の指摘するように彼らの中と自分の内側に潜む罪深さなのである。彼が叔父や母の中にある罪深さを浄めるために生まれてきたと自負する自分自身の中に同じ貪りと色欲の根源を見出すとき、「天の鞭であり、また御使い」である筈の自分が復讐の適任者ではないことを知る。彼が母親の不貞やオウフェリアの変節（と彼が誤解したのであるが）に対して極度に嫌悪感を抱くとき、それは自分の内面の淫欲に対して感じている彼の嫌悪感の表われでもある。オウフェリアに向って彼は自分の罪深さを乱暴に言い表す。「私は傲慢で復讐心がつよく、野心家だ。考えきれない程、想像できない程、すべてを行動に移す時間がない程多くの罪をかかえていて指一本で自由に命令できるのだ。私のような者が天地の間をはいまわりながら何をなすであらうか。おれたち男共はすべて全くの悪党なのだ。おれ



たちの誰も信じてはなけなう。」(I am very proud, revengeful, ambitious; with more offences at my beck than I have thoughts to put them in, imagination to give them shape, or time to act them in. What should such fellows as I do crawling between heaven and earth? We are arrant knaves' all; believe none of us.) (III. i. 128-134)。ポロニウスの形式的行為主義に異議を唱えて王子は言う。「旅役者たちの功績に従って彼らをもてなせば、鞭をまぬがれる者は一人もない。あなたの高い地位と階級に従って彼らをもてなさない。彼らが歓待に値しなければしない程、それだけあなたの恵みの愛に価値が増すのだ」(「Use them (=players) after their desert and who should 'scape whipping? Use them after your own honour and dignity; the less they deserve, the more merit is in your bounty.」) (II. ii. 562-565)。人の行為でなくイエス・キリストにある恵みを信仰によって受ける以外に人が義とされる方法がない以上、他人に対しても自分の受けた神のあわれみによって他人の罪をゆるし、資格のない人をもてなすべきだというのである。ポーシヤの神のあわれみを述べた思想をのぞいては恩恵と罪の関係をパウロ的にこれ以上適切に表現できないと思われるこの言葉は、もし神の贖罪の恵みがないならば、人の自然の肉は罪と死によりて塵に帰る以外に末路はないことを表わしている。「しかし今のおれにとって塵のこの精髓が何なのか。人はおれを楽しませない。女も同じく喜びではない。」(And yet, to me, what is this quintessence of dust? man delights not me; no, nor woman neither……) (II. ii. 328-330)とローゼンクランツとギルデンスターンに語るのはこのためである。オウフェリアも彼にとって「たくさんの子を動物のように生みおとす人」(“a breeder of sinners”) (III. i.) にすぎないからである。

オウフェリアをむさぼるようなひどい王子の愛と叔父に対する彼の情愛の復讐の愛は、神のあわれみと恵みから離れている人のおちいる「自然の罪深さ」を充分に表わしている。それは王子が特愛したトロイ落城の

一節によっても表わされる。復讐に狂ったギリシャの若き英雄ピラスは不吉な木馬の腹の中に潜伏していたとき、「彼の黒装束で固められた腕は、彼の意図とひとしく黒く、闇夜に似ていた」（whose sable arm, Black as his purpose, did the night resemble）（II. ii）。敵側の「父、母、娘、息子たちの血で恐ろしいまでに色どられ、その血も焼き焦がす街の火で糊状に全身にくばりつき」（“horridly trick’d with blood of fathers, mothers, daughters, sons, Bak’d and impasted with the parching street”）。眼は血走って地獄の暴君さながら、「今や全身赤一色に塗りつぶされて」（“Now is he total gules”）。トロイの老王プライアムを探し求める。トロイの王プライアムを見つけたピラスは、怒りに任せて太刀風強く老王に切り込むが、徒に空を切る。しかしその太刀のうなりの風のすさまじさに老王は地上に倒れる。力つきたその老王の頭上にピラスの剣は嵐の前の静けさの如く、空中高く突き刺さったようにしばらくすすべもなく止まっていたが、今や復讐の火にもえて無慈悲さながら弱き老王の白頭に振りおろされる。軍神マーズの甲冑を鍛冶の神が作ったときに巨人サイクロプスは助火と化したその甲冑をハンマーで鉄敷めがけて打ち鍛えて手伝ったといわれるが、ピラスの剣はそれよりも容赦情なく老王の白髪の上に打ち込まれる。

巨人サイクロプスの大鉄槌が軍神マーズの永久不壊の鎧を鍛え上げたときの打ち込みよりも残忍な無慈悲さをもってピラスの血したたる剣が今や老王プライアムめがけて振りおろされる。

And never did the Cyclops' hammers fall  
On Mars's armour, forg'd for proof eterne,  
With less remorse than Pyrrhus' bleeding sword

Now falls on Priam. (II. ii. 519-522)

しばしの小休息のあとのこの白頭の老王プライアムに対するピラスのあらたな復讐心を同じように芝居の小休息のあとクローディアスにあらたに地獄の憎悪さもやすハムレットは、ピラスと同じく「的外れ」の失敗を演じる。芝居のあと、良心の苛責で神に祈る王を祈りの中で殺すのは、天国に敵の魂を送ることになるといふ理由から、復讐をおさえたハムレットは、神の権能を冒した暴君と化していることを証し、その後「なんと無分別な、血なまぐさい行為」（“what a rash and bloody deed is this!”）(III. iv) と母から非難される行為を犯す。王と間違えてポローニアスを殺害したのである。ピラスは「怒りと火で焙られて」（“roasted in wrath and fire”）(II. ii. 492)「怒りに任せて的から遠くを空打ちす」（“in rage strikes wide”）(Ibid., 502)がこのハマルティア（「的外れ」）はそのままハムレットの復讐の激情に適応される。老王プライアムの古剣も勿論「ギリシャ人たちにとうていどこかぬ空打ちをしている」（“striking too short at the Greeks”）(Ibid., 499) のを見出される。これはクローディアスの「私の射る矢は弦があまりに弱く張っているのでこんなに強いという風には向いていないので、もとの私の弓に再び戻ってきて私が初めに狙ったのはつきささないであらう。」（“my arrows, Too slightly timber'd for so loud a wind, Would have reverted to my bow again, And not where I had aim'd them.”）(IV. vii. 21-24) に匹敵し、クローディアスの心が神と兄ハムレット王に対して対等になろうとする傲慢——「私の王冠」（“my crown”）も「私の王妃」（“my queen”）もすべて「私自身の野心」（“mine own ambition”）(III. iii. 55) によって手に入れたもの——がすべてを的外れに導くことを意味する。彼はレイアティーズとの撃剣の試合を装ってその中でハムレットを殺す計画をするとき、ハムレットが勝負の一撃を決める度に酒杯を乾し、その度にドラムが鳴り、次にトランペットが吹

き鳴らされ、次に「大砲が天に」(“The cannons to the heavens”)響き渡るように指示するが、その大砲の天への轟きの狙いもすべて外れて彼が二枚舌の祈りで神の心を射止めようとしてもその祈りの矢は「おれの言葉は天に飛ぶ。しかしおれの思は地上にとどまる。心のない言葉は天には決して登らぬものだ」(“My words fly up, my thoughts remain below: Words without thoughts never to heaven go”) (III. iii. 97-98) という結果になって天に登らなかったように「逸脱した目的の矢はすべて発案者の頭上におちた」(“purposes mistook Fall'n on the inventors' heads”) (V. ii. 398-399) のである。

新約聖書でパウロがロマ書や他の書翰でいう「ハムレティア」(*ἡμάρτια*)とは神に対する「罪」・「罪に走る性向」(“proneness to sin”)「罪深い傾向」(“sinful propensity”)の意であるが、その動詞(“ἡμάρτανω”)は「的を射損う」(“to miss a mark”)の意である。すなわち「ハムレティアとはハムレットの特愛の祈りの言葉や美徳の言及」・「神の恩恵とあわれみの助け」(“grace and mercy……help you”) (I. v. 179)「神のあわれみの助力」(“so help you mercy”) (*Ibid.*, 169)「恩寵のよう純粋な」(“as pure as grace”) (I. iv. 33)美徳・「神の恩恵にみちた天使と御使の守り」(“Angels and minishers of grace defend us!”)に見出される彼の信仰の対象である「恩恵」と「あわれみ」という的に人の心と霊の矢が当たっていないこと、すなわち恵みから離れていることをいうのである。ハムレットが芝居の良心捕りのあと、良心に苦しむ王の祈る姿を見て、王が祈りで「魂が浄められている状態で殺すこと」(“To take him in the purging of his soul”) (III. iv. 85)は彼を天に送ることになると見誤って復讐の一突きを控えることも、淫らな床での楽しみの最中の彼を「救済の一かけらもなす」(“has no relish of salvation”) (*Ibid.*, 92)ように王を殺して「地獄行き」を方向づけようとすることもすべて彼がピラスの復讐の欲望で神の恩恵の的を射抜いていないハムレティアからきた傲慢に帰せられる。王の祈りは形のみで天の心を遠く離れて射るように、ハムレットの盲

目の心も冒瀆という的外れを犯している。人の靈魂の帰属は、人のものでなく、神の権能に属するからである。これはその直後に起るポローニアス殺しで彼の剣は恩恵的を射抜いていない彼の欠陥ある内面の心の象徴であるかのように、王と違って「カーテンを貫いて一笑きを入れる」(“Makes a pass through the arras”) (*Ibid.*, 24)。そこに見たのはポローニアスという「でしゃばりの道化」(“intruding fool”)の死体であり追う者と追われる者の立場が逆になるのである。敵はこの機会を捕えてハムレットを死の旅路の英国行きを命じる。ハムレットは神の権能をプレイして、見事にハマルティアの失敗を演じたのである。

シェイクスピアは、劇の後半で海の旅での霊的な体験のあとのハムレットに同じようにレイアティーズと争いをさせている。オウフェリアの愛を競い合う二人の男が彼女の墓の中で喧嘩をするが、かつてのすぐに自分を忘れて血の逆上するハムレットとは全く異なる、新生したハムレットは、かつての復讐と悪魔の霊に支配されていた自分の姿をレイアティーズの逆上に見る(五・二・七七—七八)。王子の喉をしめつけつつ「悪魔にとりつかれる」(“The devil take thy soul”) (V. i. 280)というレイアティーズに「汝は正しい祈り方をしていない。たのむからおれの喉から手をはなしてくれ」(“Thou prayst not well. I prithee, take thy fingers from my throat.”) (*Ibid.*, 281—2)と彼をたしなめるハムレットは、その後で二人の撃剣の試合をする直前、レイアティーズに赦しを求めるが、そのときも同じく「的外れ」のイミジャリを使い、又ロマ書のパウロの比喻を借りて弁解をする。パウロが「悪をなすのは私でなくて自分の中に住む罪だ」というように「ハムレットがレイアティーズに悪をなしたのはハムレットにあらず、彼の狂気である」と。

レイアティーズに悪をなしたのはハムレットであつたか。断じてハムレットにあらず。……ハムレットの狂気であつた。

Was't Hamlet wrong'd Laertes? Never Hamlet. .... His madness. (V. ii. 247, 251)

パウロもまた自分の罪について同じことをいう。

私がそれ（悪）をするのはもはや私ではなく、私に住む罪である。

It is no longer I that do it (= what I do not want), but sin which dwells within me. (Romans, 7:17)

更にハムレットは自分の狂気を矢の射損じの比喩で表わす。

私が故意に悪をしたのではないと否定するからにはあなたの寛大な心によって私を無罪放免にしてくれ給え、私が矢を屋根越しに射たので誤って兄弟を傷つけたと考えてくれ給え。

Let my disclaiming from a purpos'd evil  
Free me so far in your most generous thoughts,  
That I have shot mine arrow o'er the house,  
And hurt my brother. (V. ii. 255-258)

この矢の射損じの比喩を使つてのハムレットの弁解は、明白にレイアティーズの復讐心の原因になっていること、すなわち彼の父を誤つて突き刺したことをハムレットが意識的に考へてゐることを示唆している。血が冷静に落着いてゐる今のハムレットは、かつて今のレイアティーズと同じように復讐に狂つて地獄との結婚をも敢てなしたハムレットを客観的に眺めることはできるが、それに反して「ハムレットが自分自身から取り去られてゐる」(“……Hamlet from himself be ta'en away”) かつての自分の状態は「怒りっぽく、無鉄砲」(“splenetic and rash”) (V. i, 283) や「汝が知恵あるなら恐れる危険なもの」(“something dangerous which let thy wisdom fear”) (Ibid., 284-285) をもつ古いアダムであつた。この神の恩恵から「取り去られてゐる」ことを「狂気」の的外れと弁解しても、レイアティーズには通じないし、当然レイアティーズがその弁解を受け入れることにためらいを感じるのである。それを前以つて見抜けなかつたのはハムレット自身の心の闇の中に深く眠つてゐる自分の罪と狂気に対する徹底的認識を神の恩恵の光によつて完成させていないことにも由来してゐる。というのは、クロードディアスとレイアティーズの悪の計画を見抜けないことは、ハムレット自身の中にある自分の無限の悪をマクダフと同じく見抜けなかつたことからきているからである。マクダフが自分の妻子を虐殺するマクベスの悪を自分の中に見抜けなかつたように、ハムレットもクロードディアスとレイアティーズの悪を自分の中に認識できなかった。彼の狂気という罪を神の恩恵という矢で射止めていなかったことからくる内面的の外れからすべてはきてゐる。「的外れ」のヒントは、Roger L. Coxのすぐれた論文“Hamlet's Hamartia” (*Between Earth and Heaven*) に負つてゐるが、しかしコックスは内面的のハマルティアには全くといつてよいほど言及してゐない。

ピラスとハムレットの共通点は、両者とも復讐の血たぎる暴虐性において盲目的な「的外れ」の剣を内面的にも外面的にも振るうことのみではない。いざ復讐の剣で敵の息を止めようとする段になると、ピラスが嵐の

前の静けさの如く、頭上に高く上げた剣が宙に突き刺さったように固定して動かないように、ハムレットの剣も復讐を果たす段になると、信仰によって神の恩恵に任せてゆくか、または「武器を手に取り」、自分の腕に頼って暴君を倒すかの迷いで一休止する。しかしピラスがそのあと復讐の目覚めのためにあらたに血の仕事にとりかかるように、ハムレットも独白のあと、復讐の武器をとる。

みよ、老いたるブライアムの白頭に振りかざされたるピラスの剣は、虚空に突き刺さって固定しているように見えた。まさに、絵の中に描かれた暴君のようにピラスは立ち止まり、己が意志にも忠実になれず、さりとて剣の一突による目的成就にも走れずに、迷いの静止の如く、なすことなく突っ立っていた。

しかしそれは嵐の前の静けさで、雲は微動もせず、不敵な風も声もなく、大地は死の静寂、突如として大気を引き裂く雷の轟音、そのようにピラスも静止のあと、あらたに復讐に目覚めし者の如く、昔に倍して血の仕事にとりかかる。

for lo! his sword,

Which was declining on the milky head

Of reverend Priam, seem'd i' the air to stick:

So, as a painted tyrant, Pyrrhus stood,

And like a neutral to his will and matter,

Did nothing.

But, as we often see, against some storm,



A silence in the heavens, the rack stand still,  
The bold winds speechless and the orb below  
As hush as death, anon the dreadful thunder  
Doth rend the region; so, after Pyrrhus' pause,  
Aroused vengeance sets him new a-work; (II. ii. 507-518)

この復讐の意志とそれを行為に表わすことによる目的成就の間の間隔は、ダンカン刺殺の前のマクベスが「この一突きは現世では大願成就、事の終始であるかもしれないが、しかしこの世の岸边と渚で来世という大海原を犠牲にしてこそ」(“this blow Might be the be-all and the end-all here, But here, upon this bank and shoal of time, We 'd jump the life to come.”) (*Macbeth*, I. vii. 47) と言つてニダの裏切りのように迷いの悪夢で悩まされ、またブルータスもシーザー暗殺の前に不眠の夜を過ごして「恐るべき事をやりとげることとそのため最初の発動の間には悪夢や恐怖の夢の如き時間が横たわる。」(Between the acting of a dreadful thing and the first motion, all the interim is like a phantasma, or a hideous dream.) (*Julius Caesar*, II. i. 63-65) と自分の内面の分裂を吐露する。ハムレットも同じく血氣の一撃が万事の完成と知りつつも、その一撃のもたらす悲劇と禍いの悪夢を恐れて、アダム「武器」を捨てて決意をする。けれどもそれはピラスの血だらけの行為の前の静けさにすぎず、ブルータスの如く「自らの意志で救を求める」血の行為に走る。

このように見るとき、ピラスのプライアム王に対する激情による「ハマルティア」の罪とそれを決行する前の悪夢のような一休止にあたる剣の宙における固定はすべてクロードディアスへの復讐に燃えるハムレットのハ

マルティアと独白の内面吐露に表明される王子の「思考という青白い漆喰いで病的に塗りつぶされ」た決意に見られる行動の静止に適應されるし、後にはオウフェリアとの関係においてもハムレットにこのハマルティアは適應されてゆくことからピラスの暴君振りはハムレットの復讐の憎悪と女性をむさぼるひわいな感情のもとから悲劇を想像力で追ってゆくときに重要な解決の鍵の役目を果たすのである。

かくして英国送りになったハムレットは、海の旅でポローニアス殺害によって生じた「悔改め」（三・四・一七二）の実が生じ、劇の始めに示された彼のパウロ的信仰が苦難によって純化され真の神を靈的に体験してゆく。今までのハマルティアは消え失せて、恩恵との合体によって救に至る射的が始まる。シェイクスピアは、ハムレットの靈的体验を「人の最後の目的を形作る聖なる神」や「雀一羽の落下に」見られる「特別の神の摂理」の言葉でハムレットに語らせるのみならず、劇の前半で見られたハムレットの狂暴さが影をひそめて、自制心のつよい、冷静なハムレットが「的外れでなく、希望達成のための的を仕止めてゆく行動を通して描いている。そして最後にレイアティーズとの撃剣の試合で、レイアティーズに「当り、手応え十分の当り」(A hit, a very palpable hit) (V. ii. 294) を与えるときにハムレットがレイアティーズや王の画策の毒剣が「的外れ」の不首尾に終ることが予想されるのである。一方益々悪魔に近づき、悪魔と合体した王とその手先のレイアティーズは、神の恩恵から遠くを射る「的外れ」の結果、万事が彼らに逆行して、果てはハムレットの一撃でレイアティーズも自ら仕組んだわなにはまって倒れ、王もまたすべての悪事が露頭してハムレットの剣を身に受けて死の審判を受ける。

罪意識で苦しむ者はハムレットのみでなく、実際に行爲に移した罪を犯すクロードィアスやその他の人々もすべて良心の苛責で苦しむ。しかしハムレットの内面の罪深さの苦しみと違って彼らは「内面の罪深さよりも罪深さ」(“guiltier than my guiltiness”) (Measure for Measure, V. i. 368) 行爲に移された罪を犯した結

果、悔改めようとしてもこの世の惡の楽しみに足をからめられ、鳥もちに捕えられた鳥のように自由になろうとあがくほど自由を奪われてゆく。内面の腐敗からカインの罪を犯した王は、この世の欲の奴隸になっているだけに神の恩恵に心を向けながらも、罪の実から手を離すことができず、祈ろうとしても惡の実にひかれて祈ることができず、結局は恩恵に背を向けてマクベスのように惡魔の靈と合体して更に血の川を進んでゆく。クロディアスは二度もカインの殺害に言及する。「最初の亡骸<sup>なきがら</sup>から今日死んだ者まで」(“From the first corpse till he that died to-day”) (I. ii. 105) と「おれの罪には人類最初の、最古の神の呪い、すなわち兄弟殺しの罪がいつかはなれなう」(It (=my offence) hath the primal eldest curse upon't, A brother's murder!) (III. iii. 37-38)。後者の言及はハムレットの芝居によって良心を捕えられたときであることはいふまでもない。カインの罪が重くのしかかり、祈りたい心と祈れない心の葛藤に苦しむ。

この呪われた手は兄の血で本来の自分の手より厚くなっているならば、如何。またその手を雪のように真白に洗い清める雨はやさしい天（神）には充分にないならば、如何。

What if this cursed hand

Were thicker than itself with brother's blood,

Is there not rain enough in the sweet heavens

To wash it white as snow? (III. iii. 43-46)

神に罪の赦しを求める心も、彼が手にしている王冠と王妃と野心を離さない限り、祈りに突入できない。「悔

改めぬならさうせなら」(“what can it not?”)と信じ、「悔改めぬならさうせを試せ」(“Try what repentance can.”)と語る。この「おれの王冠」おれの野巾」おれの王妃」(“My crown, mine own ambition, my queen”)が彼の肉欲をとらえて地上に彼の祈りをひきおろす。彼の「鋼はたけの筋の心」(“heart with strings of steel”)は「新生児の筋のように柔へ」(“soft as sinews of the new-born babe”)ならず、「頑固な膝」(“stubborn knees”)はじくじく「曲る」(“bow”)しつづいて、心の膝は神の前にひたすらくたはなかつたのである。

母ガートルードは表面と形式のみに生きた浅薄な女性であるだけにハムレットの良心捕りも彼女には至難となる。しかし芝居によっては彼女を良心の苛責に追い込むことはできなかったが、「剣を話す」ハムレットの突きで彼女の心は真二つになる。彼女の「最奥部」(“the inmost part of you”) (III. iv. 20)にある「何物も洗い落とせない程に深く真黒に染まった汚点」(“much black and grained spots As will not leave their tinct”) (90-91)をハムレットは彼女自身に見せるとき、彼女は自分の実体を知って苦しむ。「ああ、もう話さないで。この言葉は剣のように私の耳の中に入ってくる。もう話さないで、ハムレット」(“O! speak to me no more; These words like daggers enter into mine ears; No more, sweet Hamlet!”) (94-95)。だがそのとき亡霊が現われて、ハムレットの行き過ぎをとがめるとき、彼女の目には息子の目にみえぬ亡霊と会話する姿が狂人のなせる振舞いに映り、彼女の少し目覚めかけた罪意識も狂人の言葉によるものという判断から、消えてしまう。「恩恵の愛にかけて」(“for love of grace”) (144)、「天に己が罪を告白しない、己が過去を悔改めなう」(“Confess yourself to heaven; Repent what's past.”) (149-150)とハムレットは真剣に彼女の魂を救おうと彼女に語るけれどもその言葉は空しく彼女の部屋に響く。「私は何をしたらいいのかしら」(“What shall I do?”)という彼女の答えが、ハムレットの訓戒的忠告の得た徒勞の実で

あり、彼が彼女の罪を非難し始めたときの彼女の反抗的答えと同じである。「一体私が何をしたからといって私にそんなに無作法な声を出して舌を動かして、まくしたてようとするのですか」(“What have I done that thou dar’st wag thy tongue. In moise so rude against me?”) (39-40)。

罪の沼に入りこむと、人はその罟から逃れることができない。罪の味の習慣となつて第二の自然になり、罪意識もいつかは消えてゆく。クロードディアスもガートルードも人の良心は神の恩恵なくしては目覚めの状態を長く保てないことを示す。またハムレットの人の良心捕りもすべて失敗に終ることは、ハムレット自身も彼らと同じ罪深さをもつ以上、他人の魂の救は人間の罪ある自然の限界を超えることを示す。しかしこの二人にはこの劇の「最後の審判」ともいうべき最終幕で死の審判が待っている。この劇ではシェイクスピアは性急にも最後の審判日は死のかなたにある終末論的な考え方をやめ、劇の最後幕の死の審判を「最後の審判日」としているように思える。すべて神の備え給う計画のみが歯車の如く着実に廻ってすべての悪を一つ残らずにつぶしてゆくことが強調されている。ハムレットもしかしポーニアス殺しの責を負ってレイアティーズの毒剣で倒れて死を迎える。しかし神の恩恵につながるハムレットの死は、あわれみに背いている二人の死と違って、神に仕える天使に復活する門出の死であることは論を待たない。

「最後の審判の日」はこの劇で三度言及されていることは注目に値する。この人の魂の方向を決定する亡霊の出現はジュリアス・シーザーの暗殺のときの不吉な現象と比較される。ホレイシウ<sup>3</sup>はいう「海神の領土を支配するぬれている星は……最後の審判の日がきたかと思われる程に蝕で病的な色になった」(“the moist star upon whose influence Neptune’s empire stands Was sick almost to doomsday with eclipse”) (I. i. 118-120)。ハムレットも「最終の審判日」のことをたえず意識している。ローゼンクランツとギルデンスターンの樂觀的・自己欺瞞的世界観、すなわち「世界は正直になった」(“the world’s grown honest”) (II. ii.

245-246) という彼らの言葉にハムレットは皮肉をこめて答える。「では最後の審判の日は近い」(“Then is doomsday near”) (247) と。墓掘りも同じく人の罪と審判が心から離れない。彼のつくる墓という家は「最後の審判の日まで長もちする」(“last till doomsday”) (V. i. 65)。

王と王妃も罪の感覚は日々にくすんでゆくにせよ、最後の審判日の死を恐れているし、生きている間ずっと神の備え給う不幸の悲しみから逃れることができない。王の信頼したポローニアスの死とともにその深い「悲しみの毒」でその娘オウフェリアが発狂、ハムレットが英国に島流しにされるや、王妃ガートルードの傷心、またレイアティーズがひそかにデンマークに帰ってきて王に恨みを晴らそうとしていること等が王の身に一度に押しよせる。「ああ、ガートルード、ガートルード。悲しみがくるときは、一つでなく、大隊のように多勢で束になってやってくる」(“O Gertrude, Gertrude! When sorrow comes, they come not single spies, But in battalions”) (IV. v. 77-79)。レイアティーズは父の死の原因を王に帰して民衆を連れ、武装してその先頭に立って王の宮殿に向い王のところに打ちよせる。王妃も愛する王の身の上に万一のことがあっては恐怖の色が隠せない。「レイアティーズよ、落ち着いて下ろす」(“Calmly, good Laertes.”)と王のところにいかせないように道を塞ぐ。王は「王を守る聖なる神がある」(“There's such divinity doth hedge a king”) (Ibid., 123) と言って王の神聖な権位を誇示するが、そのような聖なる神がクロードィアスを助けることはもはやない。「父を返せ」と迫るレイアティーズに王はキリストをねたま祭司長や民衆の長老たちに説き伏せられた民衆の暴動を恐れて、民衆の要求する通りにキリストを彼らに渡したピラトがキリストについて「私はこの義人の血には罪がなく」(“I am innocent of the blood of this just man”) (Matthew 27. 24) と言ふ遁れたように、クロードィアスも若いレイアティーズに「私は君の父の死について潔白である」(I am guiltless of your father's death) (IV. v. 148) と苦しい弁解をする。「恩恵も良心も地獄の底無しの穴に」(“Conscience

and grace to the profoundest pit!) 捨てたレイアティーズの激情はたちまち王の悪の奴隷となって王に協力し、二人が密議を凝らしているところに、王妃がオウフェリアの死を報らせに入ってくる。「悲しみは矢継早に先の悲しみの踵を踏むようにやってくる。悲しみはあつという間に続いてやってくる」(“One woe doth tread upon another's heel. So fast they follow”) (*Ibid.*, 164-165) と王妃の「罪の真の性質は病んでいるように、私の病んでいる魂」(“my sick soul, as sin's true nature is”) (IV. v) は、神の怒りを恐れるように嘆く。これは『リチャード二世』の王妃イザベラが、王の罪の結果の「悲痛」の具現者としての嘆きを思い出させる。「まだ生まれてこない悲しみが運命の胎の中で熟して、私の方に向かっていく。……私はあえぎつつ子供を生む母親のように、苦痛と悲哀を立て続けに生みおとすので、苦しみが減るのではなく、苦痛を倍加させている」(“Some unborn sorrow, ripe in fortune's womb, Is coming towards me. ……And I, a gasping new-deliver'd mother, Have woe to woe, sorrow to sorrow join'd.”) (*Richard II*, II. ii. 10, 64-66)。

罪の快楽の習慣はすでに王と王妃から罪の意識を奪って、彼らは聖なる神の愛の感覚を失い、それに代って審判を恐れるように運命の僥倖や運命の偶然がもたらす喜びや悲しみにあやつられる人形に墮している(『マクベス』一・三・一四三)。オウフェリアの死のもたらす更に大きい悲劇を無意識に恐怖している。

敬虔さの全くないポローニアスでさえ、良心の苛責を感じるのには面白い。王子をおびきよせる囁きとして自分の娘オウフェリアの敬虔な信仰を利用するとき、この道化は軽い罪意識をもつ。「世間ではよくある例で、我々はこの点でうしろめたさを感じる。敬虔な顔つきと聖なる勤行で悪魔そのものを我々は甘い砂糖で包み隠してしまふのだ」(“We are oft to blame in this, 'Tis too much prov'd, that with devotion's visage and pious action we do sugar o'er The devil himself.”) (III. i. 46-49)。彼も天には二枚舌を使うことが難しいことを知っている。彼の言葉を耳にしたクロードィアスも鋭い良心の痛みを感じる。「なんと鋭い鞭の

痛みをあの言葉はおれの良心に与えることか」(“How smart a lash that speech doth give my conscience!”)(50)。しかしこの道化は自分の利害のみを意識して、見えざる世界には閉ざされた門にすぎない。

神の恩恵も良心も捨てて、復讐のためにクロードディアスの悪魔の手先となったレイアティーズも試合を装った撃剣の勝負で毒剣の刃をハムレットに突き刺す直前に良心の苦痛を受ける。「けれどもおれの良心がとがめるようだ」(“And yet 'tis almost 'gainst conscience”)(V. ii. 310)。三番目の勝負でエダのような裏切り行為をなすが、自分の剣を落とされ、王子の剣を与えられたとき、自分のかけた罠に自らおちいる破目になる。彼は自分の罪を知り、死の直前に王子と赦しの交換をする。「気高い王子よ、お互いに赦し合いたい。私の死も父の死もあなたの責ではないように祈る。あなたの死も私の責ではないように」(“Exchange forgiveness with me, noble Hamlet: mine and my father's death come not upon thee, Nor thine on me!”)(343-5)。

亡霊となって息子のハムレットに魂を汚さないように復讐をせよと命令した老ハムレットの霊も実際には昼寝をむさぼっていた状態で、「パンに飽食したまま(肉欲でみたされたまま)五月の花のように父の罪が満開のとき」(“full of bread, With all his crimes broad blown, as flush as May”)(III. iii. 80-81)あの世に送られたために、死後において生前犯した罪の消滅の苦業を与えられている。

夜はある時間の間だけ歩き、昼間は火の中で断食するべく閉じ込められ、肉の自然をもって生きていた間に犯したもろもろのみにくい罪が燃やされ、浄化されるまで苦しめられるように裁かれているのだ。



Doom'd for a certain term to walk the night,  
And for the day confin'd to fast in fires,  
Till the foul crimes done in my days of nature  
Are burnt and purg'd away. (I. v. 10-13)

亡霊が自分の罪深さのために苦痛を与えられているのみならず、王子ハムレットよりも自分の罪のことを苦しんでいるような気がする。王子ハムレットはその意味で父のよき面を受け継いだことが示唆されている。

このようにこの劇の登場人物は殆どすべて人の自然のもつ罪深さか罪深さの墮落の状態から罪の行為に走ったためかのいずれかによって深い罪意識を神に対してもつか、または罪の行為によって招いた苦境に直面して自分に対して悲しみをもち、神に対する恐怖で苦しむかしている。そしてそれらはすべて罪の結果としての死の審判によって裁かれている。

主人公ハムレットはクロードディアスのような野心やこの世の欲にひかれて悪の行為を犯したのではなく、自然のもつ内面の罪で苦しむのであっても、誤りであったとはいえ、ポロニアスを殺した責から免れない（三・四・一七六—一七七）。彼の霊は天使の合唱に守られて永遠の休息に入るけれども、彼の肉体は死の審判を与えられる。悪に走って悪を楽しんだクロードディアスや悪とは知らずにクロードディアスの誘惑に屈して前夫に不忠を働いた王妃も、またクロードディアスの悪にへつらってそれを支持したポロニアスも（しかも前王ハムレットの殺害をクロードディアスが示唆したことも筋の中に隠されている）、クロードディアスの悪魔的手先になつてハムレットの死を企んだレイアティーズも、その他クロードディアスの手先として働いたローゼンクランツ

とギルデンスターンもすべて死の世界へと時ならぬ審判を与えられている。

この死の審判はオウフェリアの埋葬のときに、道化やハムレットによって神に叛逆したアダムとカインの弟殺しの罪の言及によって強い影をこの劇全篇をおおうようにおとしている。墓掘りの道化が頭骸骨を無造作に掘り返した墓場から地上に投げ出すのを見てハムレットは「人類最初の人殺しを犯したカインの顎の骨でもあるかのようにあの男は髑髏を地上に投げているな。」(“how the knave jowls it to the ground, as if it were Cain's jaw-bone, that did the first murder!”) (V. i. 82-84)。更にこのされこうべは「神を出し抜くこととする政治家の頭かもこれなり」(“This might be the pate of a politician, …… one that would circumvent God?”) (86) とつけ加える。すべてアダム、カイン、野心深い政治家等は神を欺こうとした傲慢の罪にみちた罪人たちである。道化はアダムの職業に言及して「アダムは掘った。武器なしで彼は掘ることができたか」(“Adam digged; could he dig without arms?”) (40) と言ったとき、これは独白のハムレットの “To be or not to be” を思ひ出させる。信仰に従って忍耐の道を取るべきか、それとも「武器を取って海なす艱難に向って立ち向う、戦ってそれらを滅ぼすこと」(“to take arms against a sea of troubles and by opposing to end them”)——後者の道はブルータス、ヘンリ四世、マクベスの取った道であり、永遠の祝福から離れた、滅亡の道であることは、かつてハムレットが自ら選んで経験すみのことである。そして道化は更にオウフェリアの死を自殺と誤解して、彼女もまた「自らの意志で自分の救いを求めた人」(“she …… that wilfully seeks her own salvation”) (1-2) であり、「自らの罪を犯していない人」(“he that is not guilty of his own death?”) (20-21) とは区別されるべきであることを説くとき、ハムレットが復讐の情熱にもえて血に支配されて、神の恩恵を忘れて的外れの剣の一撃で人を殺した自分をも死の運命に方向づけたことを道化は意識して救について述べていることに注目すべきである。従って道化が「墓掘りの作る家は最後の審

判の日まで長持ちする」(“the houses that he (=a gravemaker) makes last till doomsday”) (64-65) というとき、この最後の審判は神に叛逆する全人類の罪とその報いの死のみならず、この劇のすべての登場人物、とくにハムレットの罪と死をも強調している。ハムレットが道化の掘っている墓がオウフェリアの墓であると知るとき、それは彼自身の罪が遠因的に招いた死であることから、彼はその死の責を彼女の父の死の責と同じく最後の審判の日まで長持ちする如く自身の上に負ってゆかねばならない。王子の死の更に切迫した覚悟は復讐を真近にひかえてこのときに固められると解すべきである。アレキサンダー大王の死して酒樽の栓にかわるこの世の空しさや罪と死による人の運命についての瞑想や理性的・ストイシズム的な「人間覚悟が大切」という決意のみによるものではない。ハムレットの死に対する態度は死の覚悟以上に死のかなたにあるものの確信と希望からきているからである。

すなわちハムレットの死の覚悟は罪と死という消極的な信仰からのみではなく、もっと積極的な信仰の靈感から生じている。それは彼のかつて愛したオウフェリアが「不具同然にされた葬式で」(“with such maimed rite.”) (241) 野辺送りをされているのを見、その亡骸は自殺者のものであり、更にその後それがオウフェリアのものであると知ったとき、彼の彼女に対する愛は、彼女に対して彼の思違いから彼のなした野蛮な扱い方を思うにつけて、神に対して深い悔改めに導かれる。神の恩恵とあわれみが天上において彼のために祈る彼女の霊によって一層天より降りハムレットの魂に霊の新生を与えるようになる。かつてオウフェリアの在世のとき、ハムレットは彼女の祈る姿を見て「美しいオウフェリア、乙女よ、汝の祈りに私の罪が思い出してもらえよう」(“The fair Ophelia! Nymph, in thy orisons Be all my sins remember’d”) (II. i. 89-90) と祈ったが、その祈りは今や神の御もとで「神に仕える天使」(a ministering angel) (263) になって彼のために祈る彼女によって実現されてゆく。「おれはオウフェリアを愛した。四千人の兄弟が総出できても、おれ

の愛にはかなわぬぞ」(“I lov'd Ophelia: forty thousand brothers Could not, with all their quantity of love, Make up my sum.”) (V. i. 291-293) と言いつつハムレットが自分の愛を告白する。それは兄レイアティーズの王子に対する呪い——妹の「極めて繊細な感受性を奪ったような悪業を働いた、地獄行きの奴に三倍の禍が三の十倍になって降りかかれ」(“treble woe Fall ten times treble on that cursed head whose wicked deed thy most ingenious sense Depriv'd thee of”) (Ibid., 268-271) と叫んだ兄レイアティーズの言葉に刺激されて出た言葉である。妹への不憫さと愛からハムレットに間違った非難をしているとはいえず、兄の咎めの言葉は、ハムレットのかつての復讐と好色的なむさぼりの愛にみだされた自分の「自然のままの」古いアダムの罪、何よりもオウフェリアの清純な祈りの姿をさえ売春婦の人を欺く厚化粧にたとえて彼女を侮辱に近い扱いをしたことを思い出させるには充分である。

オウフェリアの墓場で死んだ彼女との再会はかつて愛した彼女への愛を復活させたのみではなく、彼女の死の間接的責任を痛切に感じさせたことから今までの苦しみの中で「最も困ったときに神の恵みとあわれみが助け給う」ことを祈り求める結果になるのである。ハムレットの死に対する態度、それはハムレットの救につながるものであるが人生の空しさや人の罪とその結果の死についての瞑想や避けることのできない人の普遍的死に対する諦観的ストイシズ——覚悟こそすべて (“Readiness is all”) というよりむしろ明白には我々には述べられてはいないけれども、また発見するのに容易ではないけれども、P・ミルワード教授の指摘するように「我らの主イエス・キリストの恩恵」(“the grace of Our Lord Jesus Christ”) (ロー書一六・二〇)の中に示唆的に劇の終りに示されている。

しかし、天にあるオウフェリアの恩恵を通して実感されるキリストの恩恵によって死のかなたでの復活の希望によってであると私は付け加えたい。このような説明では充分でないという読者には、私はこの『ハムレ

ト』劇ではシェイクスピア自身で芸術上の構成から控え目にしか述べていないけれども、『冬の夜語り』におけるレオンテーズとその妻ハーマイオニの関係を述べれば理解できると信じている。ハムレットが母親のふしだらな再婚から女性すべてを姦通の傾向のあるものをきめつけてオウフェリアをも罪ある女の一人に数えて彼女に「尼寺に行け」（娼婦になれ）という意味）とまで言って乱暴な呼び方をしたことが、その後の彼女の父の死を契機として発狂と死に至らせたように、レオンテーズもまた嫉妬から自分の妻を死（仮の死）に至らしめる。それまでは妻が生んだ赤児さえも遠くに捨てるように命じていたのに、またデルフィの御神託が妻の潔白を述べているにもかかわらず、その神託をも虚偽と言ってはばからないのに、自分の息子の死と次いで妻の死の報告を受けるや、嫉妬で狂った彼の暴君振りはその影をひそめる。始め息子の死の報をきくや、妻に関する神託を冒瀆したことへの赦しをアポロの神に求め、悔改めに専心する。

アポロの神が御怒りになっている。神々御自身がおれの不正を打とうとなされたのだ。

Apollo's angry; and the heavens themselves

Do strike at my injustice. (*Winter's Tale*, III. ii. 147-8)

このあと自分が妻の愛を奪ったと彼が想像した友人ポリクセニーズを毒殺しようとしたことなど自分の罪が黒く見えてそれを告白する。そのあとすぐに妻の死が伝えられるや、「聖者のような悲しみ」(A saint-like sorrow) (V. i. 2) の十六年間を妻と子の墓に詣でて「おんげ」(“penitence”)の「涙を流し」つづける。彼が「犯した罪で贖罪しなかったものは何一つない」(“no fault could you make which you have not

redem'd<sup>2</sup>) (V. i. 2-3) とられる十六年間の神々の恩恵を仰いだ生活の後でも妻の「幼児の無邪気さと神の恩恵と同じ程にやさしかった」(“she was as tender As infancy and grace”) (V. iii. 26-28) ことが忘れられない。

亡き妻のこと、彼女の美徳を思うにつけ、私が妻になした悪がいつも思い出される。そして自分自身になした悪を今も思う。

Whilst I remember

Her and her virtues, I cannot forget  
My blemishes in them, and so still think of  
The wrong I did myself; (V. i. 6-9)

『オセロウ』で「聖なるデズデモウナ」(“the divine Desdenwna”) と呼ばれる「神の祝福にみちた性質」(“of……so blessed a disposition”) (*Othello*, II. iii. 328) の女性デズデモウナを斥けて、肉欲の自然人イアコウと合体するとき、オセロウは神の恩恵を象徴するデズデモウナをすて、自然の激情に支配されるように、レオンティースもまた「恵みの婦人」(“our gracious lady”) (II. ii. 21)、「いと恵み深い貴婦人」(“our most gracious lady”) (I. ii. 233)、「恵み深い女王」(“the gracious queen”) (I. ii. 459) と呼ばれるハーマイオニィを斥けることによって無限の放縦の奴隸となる。裁きにかけられるハーマイオニィはイモウジエンのもつ忍耐と悲しみの象徴のように夫の暴虐性(テイクニヤ)に耐える。彼女は裁判にひき出されることを知って言う。

聖なる神々が人が実際になすまに人の行為を見そなわし給うならば、人の暴虐は自分のなしている間違った告発が無垢なる者を裁いていたと分るや顔をあからめ、暴虐は無垢の忍耐を見てふるえ上がるであろうことを私は信じて疑わない。

if powers divine

Behold our human actions, as they do,

I doubt not then but innocence shall make

False accusation blush, and tyranny

Tremble at patience. (III. ii. 29-33)

父の命令で遠くに捨てられた赤ん坊は、その土地の羊飼いに拾われ成長する。「恩恵の中で成長した」(“grown in grace”) (IV. 21) と言われる娘バーディッタの靈的な成長は、神々の目にも人の目にも驚異であり、「恩恵とその優雅な美が人の心にひきおこす讚美の中で」(“in grace equal with wondering”) (21-22) 育った結果であるが、それはまた同時に父王レオンティーズの靈的成長の象徴でもあった。

オウセロウがキリスト教の形式的な教義と洗礼を付焼刃的に身につけた形式的信仰をもち、中味は自然の本能のままの野蛮人であり、又はイエスを裏切ったユダ(『オウセロウ』五・二・三四六)のように、嫉妬の火をつけられるや、彼の血の逆上はとどまることを知らず、「暴虐の憎悪」(“tyrannous hate”)に燃えてデズデモウナの愛を裏切る。

レオンティーズも嫉妬の激情を制止できず、血のわきたままに盲目的な猜疑の想像力に溺れて妻に復讐を果たそうとする。彼の妻であり王妃でもあるハーマイオニイの侍女ボーライナは彼を「暴君」<sup>タイラント</sup>又は「暴虐」<sup>タイラニイ</sup>と呼ぶこと数回にわたる。彼女は王妃の死を知るや、暴君に対して怒りを発する。「汝の嫉妬とともに相働く汝の暴虐性」(“thy tyranny, Together working with thy jealousies”) (III. ii. 180-181) は証拠もないのに王妃を猜疑して彼女を苦しめたが、しかし王妃の死と比べればそれも無にひとしいといい、王妃の目にも口にも輝やきや色合が消えた今、彼女の呼吸の音が聞えなくなった今はその暴虐はその頂点に達したと非難する。「ああ、汝暴君よ、これらのことを後悔し給うな、そは汝いかばかり欺いたとてそれらは歎きに余る消し難き悲しみなればなり」(O thou tyrant! Do not repent these things, for they are heavier Than all thy woes can stir) (208-210) ところで王に迫る。また神託も彼を「レオンティーズは嫉妬の暴君」(“Leontes a jealous tyrant”) (134-135) と断定する。

このように嫉妬の暴君が恩恵にみちた女性を拒絶するときに、神々の怒りにふれて苦難に見舞われ、それによって自己に目覚めて恩恵を仰ぎ、恩恵を通して自己の自然を超越するパターンは、この『冬の夜語り』のレオンティーズのみでなく、リア王にもマクダフやマルコムにも適応されてゆく、何よりもハムレットが同じパターンを踏んでゆく。劇の前半で復讐の暴君ピラスのようなハムレットがオウフェリアの愛をふみにじったとき、彼は自己を制する手段を失い大きい失敗をするが、その後、悔改めの旅路に「帆立貝のカラをつけた巡礼の帽子、杖、わらじ」(his cockle hat and staff And his sandal shoon) (IV. v. 25-26) をもって出る。ことによって、「あわれみのある海賊達」(“thieves of mercy”) に出会い、自分の死刑を執行する予定の英国に向っている船から脱出することを得て、聖なる神の摂理の存在を学び知るようになる。この霊的な神との出会によって、今までの知的概念的神の信仰からの脱皮が始まり、ハムレットは自己を知ることになる。しか



し神の意志の道具となって、「魂を汚すことなく」敵を倒すためには「雀一匹の落下にも特別の天の摂理がある」(“There is a special providence in the fall of a sparrow”)という消極的な信仰やストイック的な「覚悟が大切」(“Readiness is all”)の倫理的諦観では充分ではない、ことからシェイクスピアは、異教世界のレオンティーズにさえ十六年の歳月をかけてこの世に死して神々の恩恵とあわれみに生き、死のかたちの世界にあこがれることを学ばせる機会を与えたように、ここでハムレットにも彼のかつて愛したオウフェリアの死に直面させ、「悲しみも苦しみも、苦難も地獄もすべて恩恵と美しいものに変えてしまおう」(“Thought and affliction, passion, hell itself She turns to favour and to prettiness”) (IV. v. 187-188) 彼女の恩恵に祈り、また彼女とともに葬られることを神の恩恵に祈るハムレットを示唆的に劇の最後に表わしている。すなわちベアトリーチェの愛に導かれて神の天国に登るダンテのように「やさしいオウフェリア」(“sweet Ophelia”)の恩恵に導かれて永遠の恩恵の世界に飛翔するハムレットをおぼろげではあるが示していることが分る。シェイクスピアはオウフェリアの場合もハーマイオニィやその娘のパーデッタのように神の恩恵と自分の罪深さを知る乙女として彼女の恩恵にみちたやさしさを強調している。彼女が発狂してから王妃に「ヘンルーダ」(“true”)の花を渡す場面がある。このヘンルーダとは「悔改め」や「恩恵」を表わす花であるが、それを自分の胸にもいくつかつけていう。「この花は聖日の恵み草ともいいます。ああ、王妃様は私とは別の意味でそれを着けなくてはなりません」(“we may call it herb of grace o' Sundays. O! you must wear your rue with a difference”) (IV. v. 181-182)。王妃は彼女が悔改めなければならない罪の行為のために、オウフェリアは父の死、恋人との別離のためや自分の内面の罪深さのために恵みと悲しみの花をつけるという意味で違っているというのである。

『無駄騒ぎ』のヒアロウを不貞の女性と誤解して結婚を拒否したクロードイオウも、そのために死んだ彼女

（実際には彼女の父が死んだという噂をたてたもので、生きていたのだが）が潔白であることを知るや、クロード・オウは苦しんで、その償いのために父親の要求をどんなことでも受け入れる覚悟をきめる。また『シムベリン』のポストゥーマスも婚約者イモウジェンを誤解から不義の女性と思い込み、ピサニオウに彼女を殺すように命じるが、あとで彼女の無垢を知るや、オセロウにも似た苦しみ方をする。自分を「冒瀆を犯した盗人」(A sacrilegious thief)と呼び、彼女を思い出して「美德の宮」(“the temple of virtue”)と呼ぶ。この二人の男たちは、自分の罪に苦しんで彼女たちの恩恵の愛によって新生するが、その後の彼女たちとの再会は今世での永遠の再会を示唆する。オセロウの場合でも、もしオセロウが自分のために妻の死を悲しむのではなく、神のために悲しむレオンティーズのように自分の内側に棲む「割礼をうけた犬」(“the circumcised dog”)に苦しむならば、シェイクスピアは『冬の夜語り』の主人公と妻のように来世でのデズデモウナとの再会と永生を示唆したと思われる。ともかく『オセロウ』での救われることのない悲劇的結末を永世での再会の喜曲に変えたものが『冬の夜語り』であるように、ハムレットとオウフェリアの愛の終局は、墓場の埋葬で終るのでなく、彼女と共に葬られて、共に永生において復活と共に神の恵みの中で生活することが「審判の日まで待つ」(“last till Doomsday”)のみならずさらにその日を超えて、「死の恐怖なき、より良き来世」(“better life, past fearing death”)において永遠にまでつづくことが予示されている。それはポステューマスとイモウジェンやクロード・オウとヒアロウの恋人たちとの復活的再会によって一層作者の意図が確証されるからである。しかしこれらの確証がなくとも何よりも劇そのものがそれを証する。その一つは復讐に狂って悪魔に靈魂を渡したレイアティーズが自分のかけた罠にはまって毒の刃を身に受けたとき、試合の前に王子の和解の申し入れを断ったのにハムレットに自分の方から和解と「赦しの交換」(“Exchange forgiveness with me”) (V. ii.)を求めることである。レイアティーズにおいては、死の間際のこの時に愛と赦しの信仰

は完成されるが、ハムレットにおいてはこの積極的な愛と赦しはもっと早くから現世において、すでに霊的復活をとげていることが示されており、来世での肉体の復活は霊の復活と比べれば極めて簡単なことであることが余韻として残されているのである。そして最も霊的復活を証するものは、ハムレットの復讐の仕方である。ハムレットの天の恵みに任せての復讐の遂げ方は神の恩恵によって霊において新生したマクダフやマルコムのマクベスに対して取った復讐と全く同じである。

マクベスは振りおとされるように熟した。天上の神と天使たちは、彼らの道具（として働く人々）をうながしている。

Macbeth

Is ripe for shaking, and the powers above  
Put on their instruments. (*Macbeth*, IV, iii. 236-238)

ハムレットは全く自分の復讐の意志で敵を傷つけていない。かつては彼の復讐とは関係のないポローニアスを殺し、オウフェリアの心を傷つけたが今は神の意志を己が意志として神の道具となって敵の奸計に自ら飛び込んで目的を成就するが、関係のない人は一人も殺害していない。レイアティーズの毒剣の刃で突かれたときも、その剣の先に毒の細工が仕かけられていることさえ知らないで、ただ相手の切先におおいのない剣を手にしたために、相手の剣をたたきおとして自分のものと交換したままであり、毒が塗ってある剣とは全く知らないで、相手の剣で相手を一突きしただけである。王妃の死も王の仕組んだ罠に夫婦は一体の理から彼女がは

まったまでであり、彼女の死はハムレットに一切関係のないことであった。自らの毒で死にゆくレイアティーズの口から王の悪が暴露され、ここにクロード・ディアスの悪の実が神の恩恵によって熟し切ったとき、ハムレットの毒剣の一ゆすりで悪魔の木から王の悪の実が振りおとされたにすぎない。「自業自得」(“I am justly kill'd with mine own treachery”) (自分の仕かけた裏切りで本人が殺されるのは正しいという意味) とはこの場のレイアティーズの言葉である。しかしこれはクロード・ディアスにもガートルードにも適応されるが、同じく死の運命に向うハムレットには適応されない。王子の死は無垢なるものが苦しむ犠牲的、贖罪的死であるからである。コーデリアの死やデズデモウナの死と同じくハムレットの死も全人類の罪のために十字架上の苦い死をとげたキリストの死に準じているからである。それゆえにこそハムレットの死もまた彼が墓場の頭骸骨を見て、「これが、きれいな髑髏をきれいな土で一杯にされることが……彼の最後の中のものか」(“Is this the fine of his fines……to have his fise pate full of fine dirt?”) (V. i.) といって人の塵の死を拒絶したように、人の終りは墓場での空虚な頭骸骨に変化することではなく、それを越えて永遠の恩恵に復活することに高められる。右のハムレットの言葉は『リア王』の最後で王とその最愛の娘の死を見たエドガーの言葉「これが約束された終りか」(“Is this the promis'd end”) を思い出させるが、リアとコーデリアの死は、とくにリアにとってコーデリアの死が普通によく考えられているようなリアの絶望的な歎きではなく、リアの恩恵によって新生した霊の目には彼女の唇から同じく<sup>spirit</sup>霊(ギリシャ語では息と風と霊は<sup>psyche</sup>ψυχή) すなわち「息」(“breath”) が通っているのを感じて喜びにみちてリアは彼女のあとを追う。この苦難の父娘は現世においてすでに霊化して永遠の復活に入っているのであり、人の自然の罪とその報酬としての死の自然の過程を彼らの肉体は通って、彼らの復活した霊は自然の呪いを超越している。そのようにハムレットも彼の肉体は死から免れないが、彼の恩恵による新生の霊は、風の如く自由であり、何物をも恐れず、何物によっても妨げられずに父王の亡霊

の命令通りに「天に任して」使命を果たし、オウフェリアの霊と合体しつつ先に逝ったなつかしき人々の静寂の休息と永生の世界に昇る。

リアとコーデリアの死、デズデモウナの死、マクダフの母子の死、ダンカンの死、そしてハムレットとオウフェリアの死はその後のロマンス劇における復活と永遠のテーマをその中にすでに靈的に発芽させていることが分る。

そしてわしの可愛い道化があわれにも首をつられた。いないのだ、いないのだ、生きていないのだ。どうして犬や馬やねずみには生命があるのに、お前には息（霊）が全く通っていないのか。もうお前は生き返ることはないだろう。二度とは、二度とは、二度とは、二度とは、二度とは帰ってこない。

お願いだ。このボタンを外してくれ。どうもありがとう。

諸君、これが見えるか。おれの娘を見てくれ、見ろ、あれの唇を。

そこを見てくれ、そこを見てくれ。〔死ぬ〕

And my poor fool is hang'd ! No, no, no life !

Why should a dog, a horse, a rat, have life,

And thou no breath at all ? Thou'lt come no more,

Never, never, never, never !

Pray you, undo this button: thank you, sir.

Do you see this ? Look on her, look, her lips,

Look there, look there ! [*Dies.*

[*King Lear, V. iii. 307-313*]

リア王が自分の殺された最愛の娘コーデリアを両腕に抱きしめながら発する彼の最後の言葉は、人生に救のないことを歎く絶望の声として解されているのが現代の学説の趨勢であるとしても、これを反論する証拠はリアの劇には余多あるとされている。劇全体の精神が客観的確証とともにこれを証する。このリアの最後の解釈如何によってシェイクスピア全体の世界観が決定されるといわれる所以である。シェイクスピアの深い世界観の理解にはシェイクスピア自身のもった深い普遍的な世界観が読者の中に霊的な深い体験として共有されることが要求されることが示唆されている。

リアとコーデリアが死を通して霊の世界に飛翔する前に、彼らの魂は自然の肉体にありながらすでに霊的に復活していたように、ハムレットの自然もまた死を見る前にオウフェリアの死と天上での祈りを通して、神の与えた苦難と恩恵によって彼の生きた「自然の日々」において、すでに霊化し復活していたことは劇の終りには明白になり、それゆえにそれは劇の初めのマーセラスのイエス・キリストの言及「我らの救主の誕生」の「いとも聖められ、いとも神の恵みにみちている」時に深くかわってくるのである。

従って、ハムレットの霊と復活の奇蹟の力は彼がルッテルの大学で学んだパウロの神学によれば、「もしイエスを死人の中より甦<sup>よみが</sup>へらせ給ひし者は、汝らの中に宿りたまふ御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活し給はん」という言葉の中に見出されるのである。